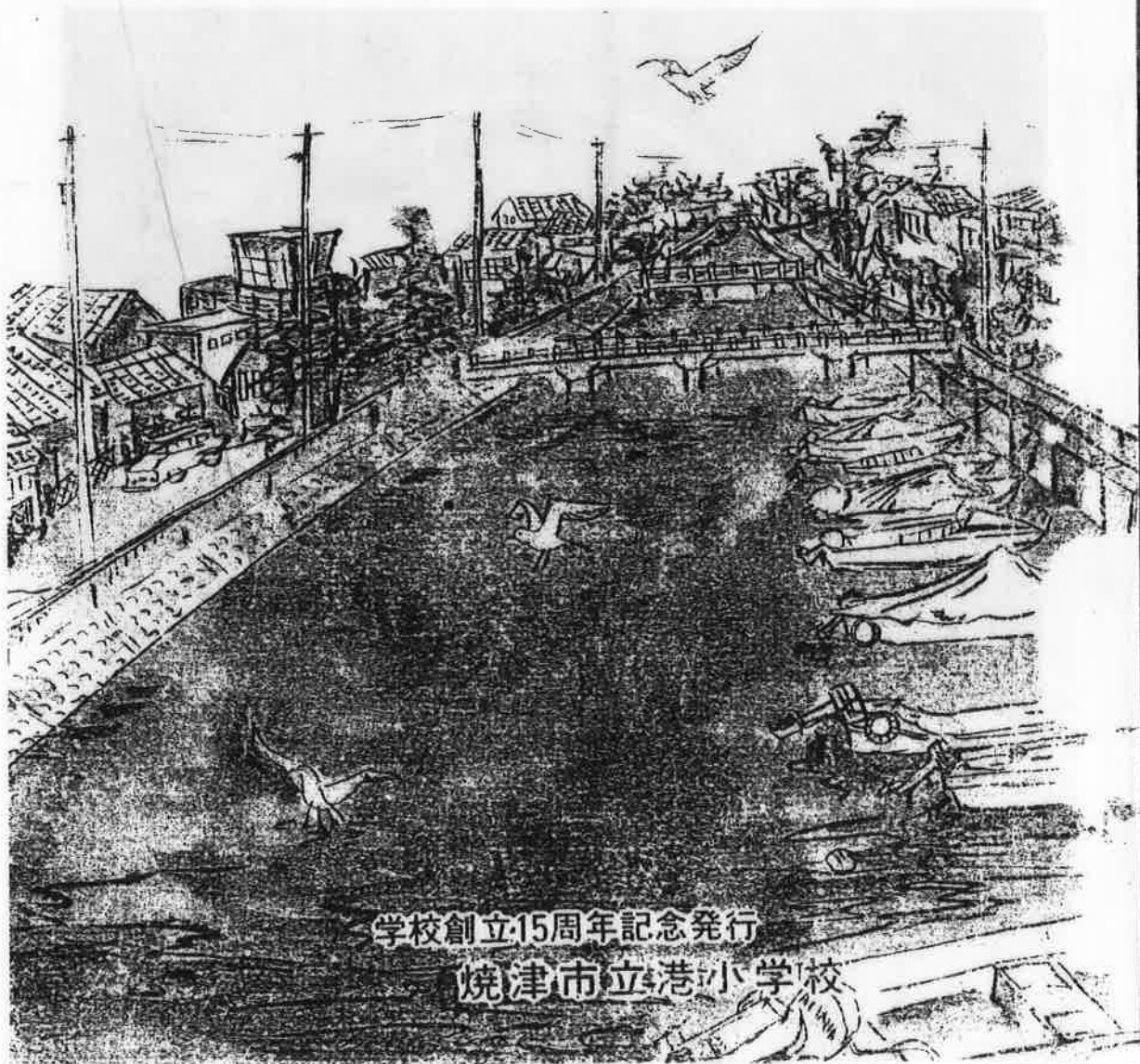


木屋川の

ほとり

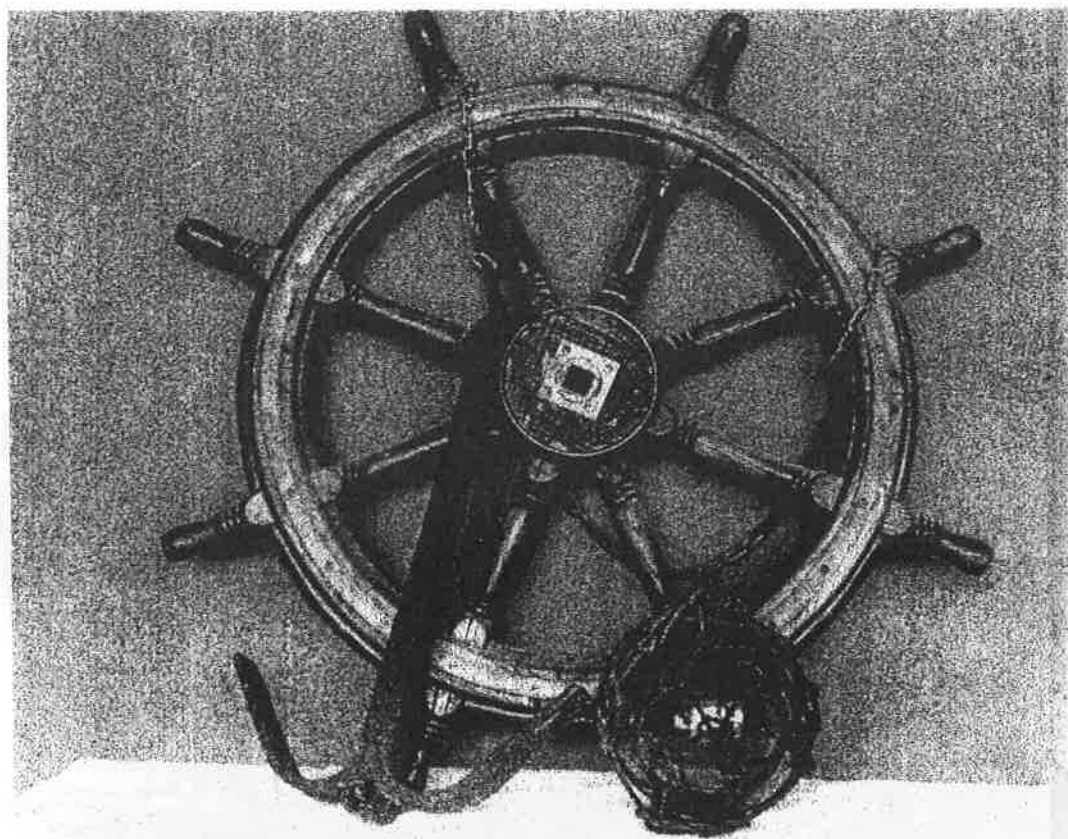


学校創立15周年記念発行

焼津市立港小学校

木屋川のほとり

ふるさとをたずねて



渚のシンボル

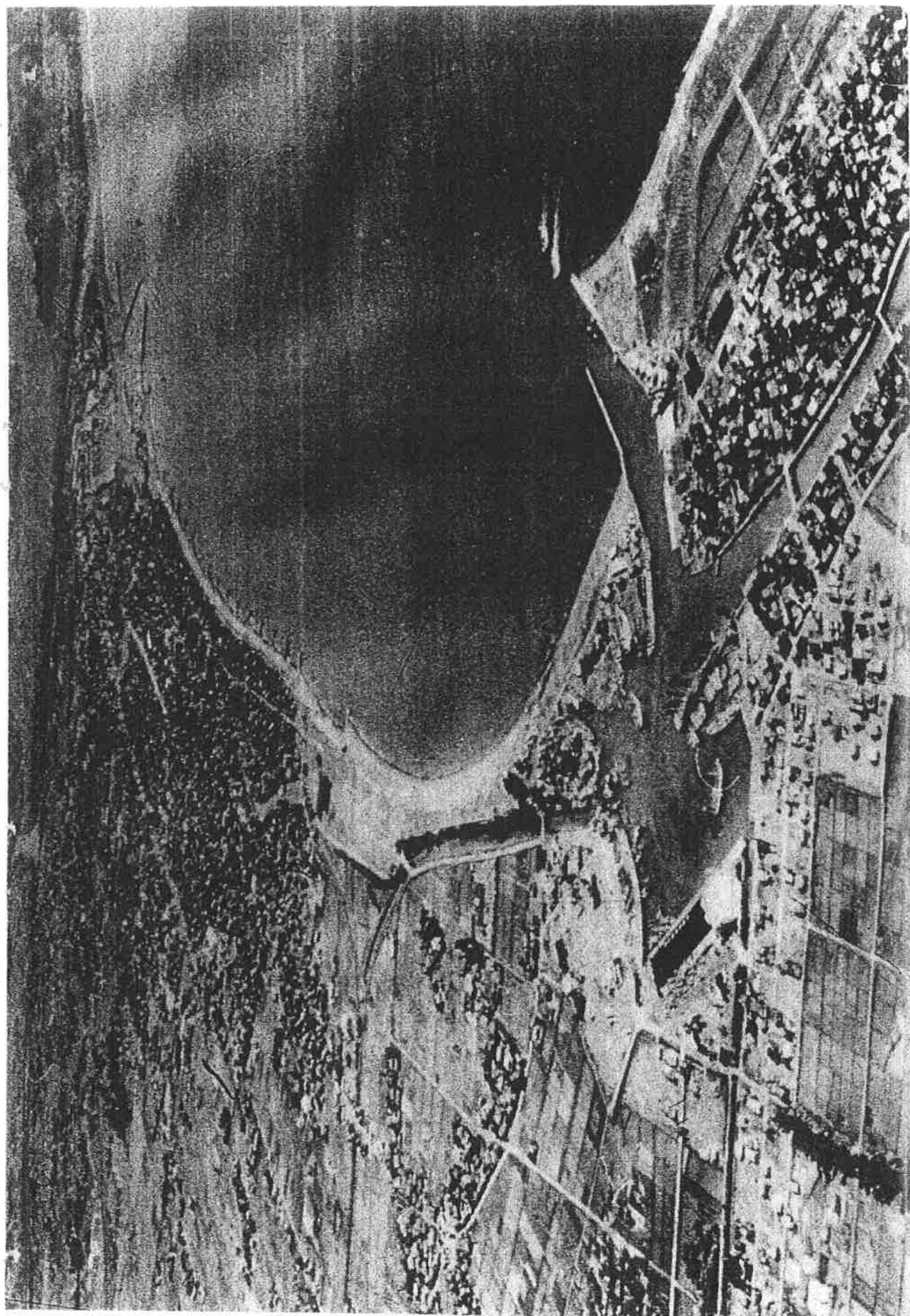
はじめに

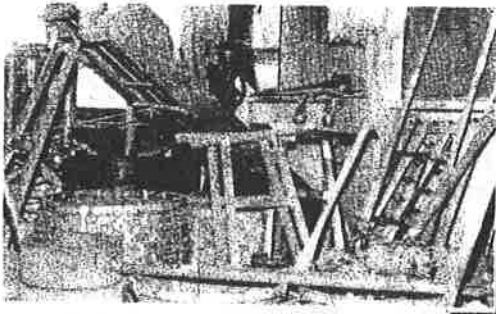
教頭 齊藤 武

私たちは、恵まれた自然環境の中でたゆみない歩みをつづけています。しかし、このような発展をとげるまでには、長い年月にわたり多くの先人たちが生活を切り開くための苦しい日々を乗り越えてきたことを忘れるわけにはいきません。

江戸時代には、信州（いまの長野県）から大井川をくだり、木屋川を利用して木材を石津の港まで運んだそうです。今回、みなさんにおとどけする「木屋川のほとり」という書名は、これにちなんでつけられたものです。

港小学校ふる里活動委員会の先生方が中心となって編集したこの本が、今後社会科の学習の中で十分に活用され、私たちのふる里について深い理解をもつことを願うとともに、ふる里についての愛着をさらに強めてくれることを望みます。

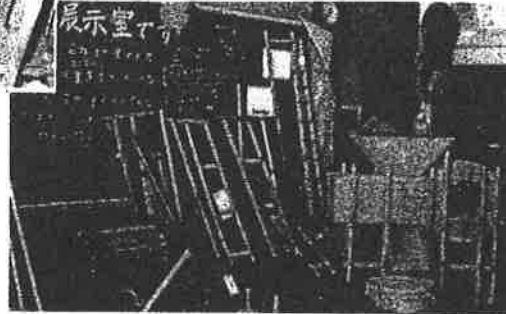




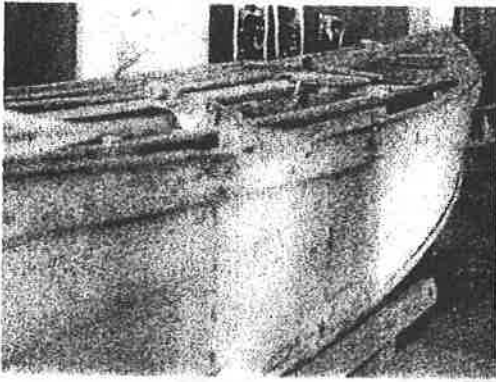
太平洋戦争ごろまで使われた農具

むかしのくらしがわかる

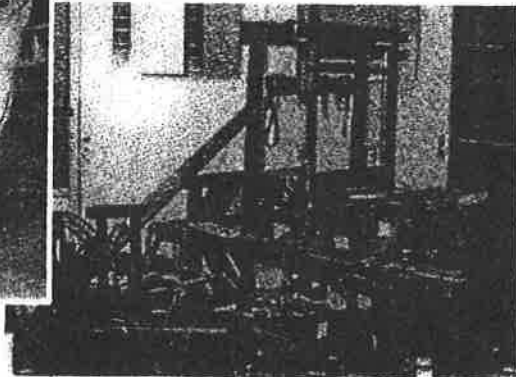
港小学校民具室



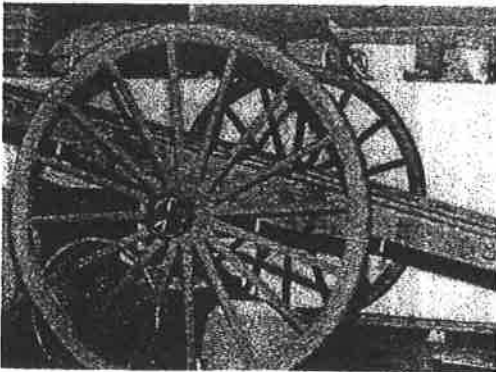
400点以上の民具が農具、生活用具、漁具に分類され、展示してあります。



漁師さんが使った和船



今でも使える機織機



たくさんの荷物を
はこんだ大八車

題字 村越正義校長
表紙絵 清水道子教諭

◇ まえがき 齊藤 武教頭……………

三、むかしのあそび…………… 35

◇ むかし話の分布図(折り込み)……………

めんこ…………… 35

じん(陣)取り…………… 35

一、民話・伝説…………… 1

飛行機…………… 36

① 波よけ地藏 (石津・田尻北)…………… 1

カッチン玉…………… 37

② 川中島八兵衛さん (石津・田尻岡)…………… 1

四、わらべうた…………… 38

③ いとかけ観音 (石津)…………… 2

花いちもんめ…………… 38

④ 証人は、お地藏さま (石津)…………… 3

なわとびうた…………… 38

⑤ 船酔いをとめる仏さん (石津)…………… 5

おじゃみうた(お手玉)…………… 39

⑥ 一本松 (石津)…………… 7

手あそびうた…………… 40

⑦ 五輪さん (下小田)…………… 8

子守りうた…………… 41

⑧ 花火地藏 (下小田)…………… 9

手まりうた…………… 41

二、史話…………… 10

⑨ 水天宮 (石津)…………… 10

五、年中行事…………… 44

⑩ 孝助橋のゆらい (石津)…………… 12

つしまさん…………… 44

⑪	松の小道 (田尻北ノ石津) ……………	13
⑫	馬頭観音 (石津・田尻北・下小田) ……………	14
⑬	木屋川 木材の道 (田尻北ノ石津) ……………	15
⑭	土地改良の碑 (田尻北) ……………	16
⑮	山梨恵吉の碑 (田尻北) ……………	17
⑯	木屋川とむかしのくらし (石津) ……………	18
⑰	石津八幡宮 (石津) ……………	20
⑱	吉永街道 (北新田 下小田 石津) ……………	20
⑲	古谷定吉 (下小田) ……………	21
⑳	無縁仏 (下小田) ……………	23
㉑	柴田川 (下小田) ……………	24
㉒	道しるべ石 (下小田) ……………	25
㉓	鳴子の松 ……………	26
㉔	小川高等学校の碑 (石津岡) ……………	28
㉕	むかしの水のとり方 (石津) ……………	29
㉖	むかしの漁法 ……………	30
㉗	塩づくり (石津) ……………	32
㉘	大変だった川口ほり (石津) ……………	33
㉙	いたちをつかまえた話 (北新田) ……………	34

えびす講 ……………	44
ヒヤクハッタイトウロンサン ……………	45
船おろしと船のかんじょう ……………	47
灯籠 (田尻北) ……………	48

六、昔のくらしを知らせる土地の名 ……………	48
------------------------	----

七、小川港のできるまで ……………	52
-------------------	----

八、石津の歴史年表 ……………	55
-----------------	----

九、木屋川河口付近の略図 ……………	59
--------------------	----

十、港小学区に関係したむかしの地図 ……………	61
-------------------------	----

〔参考文献〕 ……………	63
--------------	----

◇ 協力者一覧 ……………	64
---------------	----

◇ あとがき ……………	65
--------------	----

お話のある場所



地図を使うときの注意

- 一、土地改良などによって元のところから動いているところもあります。
(例 道じるく石 地蔵など)
- 二、番号が同じものは、それぞれのところにあります。
(例 馬頭観音、波よけ地蔵、川中島八兵衛など)
- 三、その場所だけでなく、その地方一帯に広がっているものもあります。
(例 湯つくり、徳法など)
- 四、寺院、神社などは、同じるしになりますので、書きました。
- 五、鴫子の松の語については、港小学区ではありませんが、港小学区の人たちとつながりが深いので、とりあげました。

一、民話・伝説

波よけじぞう (田尻北の浜)

これは、台風にまつわるおじぞうさまのお話です。この波よけじぞうさまができたのは、今から八十年ぐらい前のことです。

海岸には今のようには、ていぼうがなくて、台風や津波で、水が、民家の方におしよせてくるのをふせぐためにつくられたのだそうです。

このおじぞうさまは、田尻北の浜に大きな波がおしよせてきた時、白いころもをきて、三人で、両手を広げて、波をしずめてくれたと、いいつたえられています。

このおじぞうさまには、毎日、地区の人が、当番で、お茶とごはんとおせんこうをあげる

ことにしています。

おじぞうさまは、北村の浜の松ばやしの中に二か所 たてられています。

おばあさん達は、小さいころ、おじぞうさまの所で、夏休みのしゅくだいをしたり、友だちとなかよく遊んだりしたそうです。



今も、大切にされているおじぞうさま

川中島八兵衛さん (石津)

川中島八兵衛さんは、いつの時代に生きた

人なのか、どんな人だったのか全くわかりません。しかし焼津市・藤枝市など旧志太郡内では今でも、各地区ごとにまつられているようです。

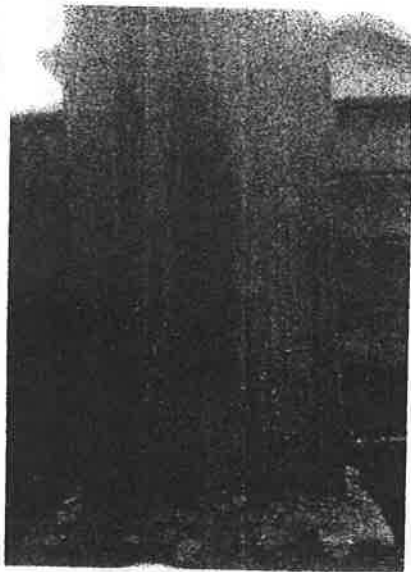
八兵衛さんは、紀伊国（今の和歌山県）から流れ来た巡礼じゆんれいとも考えられ、そのとちゅう焼津に立ち寄ったものでしょう。

八兵衛さんが死ぬ時、私をまつたら、悪病びようにかかることはないと言ゆいごん言したと言われ、そのことから、悪い病気をふせぐために八兵衛さんの碑ひをたてたと思われます。

石津にある八兵衛さんの碑には「紀伊國川中島ノ八兵衛をここにまつりておがむ…」等の文字がほられ、明治三十五年（一九〇二）に建てられました。

（一八六四）和田浜に碑を建てました。そして毎年八日を縁日えんにちとして、今日まで、おまつりを続けています。

八兵衛さんの碑は、学区内では、不岩院や長久寺境内などに残されています。



川中島八兵衛の碑

糸かけ観音かんのん
（石津 蔵珠院）

むかし、平田染屋そめやさんという家がありました

その染屋さんで、女中じょちゆうとして働はたらいていた人がいました。その女中さんは、働き者もので、気だてもよかったので、主人からたいそうかわいがられました。ある時、その女中さんが病気でなくなつたので、主人は、かわいそうに思い、ていねいにおそうしきをしてあげました。

むかしは、主人と女中さんといえば、殿様とのさまと家来けらいみたいなもので、女中さんはていねいにあつかつてはくれなかつたのです。しかし、平田家やの主人は、自分の子どものようにかわいがつていたのです。その供養くよう（死後の幸せを祈いのる）が平田家のならわしとして、後生こうせいまで、ずっと伝えられてきました。

そのような事があって、その糸かけ観音さまをおがむと、願ねがいが、かなうと伝えられて

きてきます。

今では、多くの人達が、観音さまにいろいろお願いをし、願ねがいがかなうとお礼に糸を観音さまにかけています。



たいせつにされている糸かけ観音

証人はお地藏さま（石津）

時代のうつりかわりなどで、もう昔の面影おもかげを残すところは少なくなりました。

小川から石津の港の方に行く道には、その

昔、松並木なみきがあり、高いつつみ道になっていました。

川ぞいを大きく折れるところに、水門をまたいで東の方へ行く道がつづき大変さびしいところでした。

この水門の川岸に、お地藏さまが二体、浜の方を向いて立っていました。このあたりの人々は火屋地蔵かやとよび、昔はここが、お盆のたい松を燃すも灯籠場とうろうになっていたようです。

さて、これは明治時代の早いころの、秋もふかくなつた夕ぐれどきのお話です。

ある漁師りやうしの家の五、六歳さいの女の子が、いつものように片手に油びん、片手に五厘りんのお金をにぎって、あんだんの油を買いに向かっています。ちょうど、この地藏さまの前を小走りに通り過ぎた、そのときです。土手どての松

かげから老婆ろうばが出刃包丁でばほうちようをふりかざし、この子におそいかかりました。

子どもは、大声でさけんで、助けをもとめました。しかし、だれ一人としてこの声を聞いた人はありませんでした。

女の子は、お地藏さまのまわりを何回も何回も逃にげてまわりました。

しかし、かわいそうなことに、老婆にっかり、出刃包丁ひとつきで一突ひとつきに殺されてしまったのです。

いつもは、元気に油びんをさげて帰ってくる子どもが、日がくれて、あたりがまっ暗になつても、もどらないので、家の人さがしに來て、無残むざんな姿になつた子どもを見つけ、大さわぎとなりました。

すぐに警察けいさつ（そのころは藤枝）に届け、警けい

官が来て取り調べとなりました。犯人をさがすために現場のようすを調べていると、たおれたお地藏さまのからだの下に、着物のすその縞柄の布がちぎれて残っていました。

そこで警察では、この布を証拠として、犯人をさがし、老婆をつきとめ、事件のすべてがあきらかになりました。

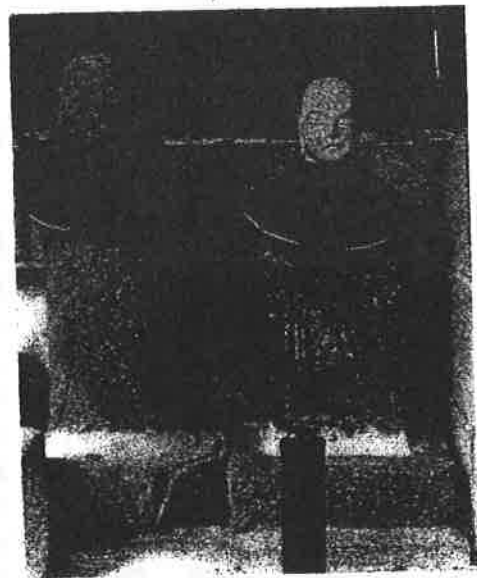
縄で手をしばられ、人力車のうしろにつながれ引っぱられて行く老婆のふてぶてしいようすを見て人々は、わずか五厘のお金で幼い生命をうばわれた子どもを思って泣きました。

だまったままのお地藏さまは、女の子のためにせめてもと証拠をにぎっていてくれたわけです。

時代は流れて、今では、このお地藏さまも、石津岡の蔵珠院というお寺の門前にあるお堂

の中にまつられています。

(『やいづの昔話』より)



蔵珠院境内に残るおじぞうさま

船酔いを止める仏さん (石津)

明治のころ、石津の水天宮の近くに、漁師の吉田幸蔵さんという人がいました。幸蔵さんは早起きで、毎朝かわいい孫をつれて、波打ちきわを歩くことを楽しみにしていました。その日も、いつものように孫といっしょに

波打ちぎわを歩いていました。ふと足もとを見るとき、うち寄せられた木切れや海草にまじって、何か形のかわったものがありました。よく見ると、小さな仏像ぶつぞうでした。高さが十センチほどで、こうはい光背（仏像のうしろにあるかざり）がついた、りっぱな木の仏像でした。

「これは、えらいものを拾ったな。もったいないことだ。こんなに朝早くほど待仏さまを拾うなんて、何かのご利益りやく（おめぐみ）かもしれない。」

幸蔵さんは家に帰り、きれいに水で洗い、さっそく仏さんにおまつりしました。

さて、幸蔵さんの家の嫁、ひでさんは、前日から田尻たじりの親せきの家にとまっていたことが、なにか胸さわぎがして、家のことが心配になり、一晩中、まんじりともしないで、朝

をむかえました。そして、朝ごはんも食べずに、急いで家へ帰りました。家の近くまできて、ヒョイと家の屋根を見あげると、五色ごしきの光が空にむかってかがやいているではありませんか……。

ひでさんは、びっくりして、ころがりこむように家に飛びこんで、

「とうさん、うちに何か変わったことがあったかい。子どもにまちがいであったじゃあるまいのう。」

と大きな声で聞きました。

幸蔵さんは、けさのできごとを話しました。

ひでさんも、ゆうべなかなか眠れなかったことや、屋根から光がかがやいていたことを話しました。

「これはきくと、けさ拾ったありがたい仏さ

まのおかげだ。」

とたいせつにおまつりすることにきめました。

この仏さまが船酔い^{ふなよひ}を止めてくれる、といわれるようになったことについては、こんなお話が伝えられています。

幸蔵さんには亀吉^{かめきち}という息子がいました。

亀吉さんは漁師のくせに船に弱く、乗るとすぐ酔ってしまうので、じゅうぶんな仕事もできませんでした。

こんなとき新しい仏さまを手にしたものから、これもなにかの縁^{えん}であろうと、親たちは亀吉さんが船に強くなるようにと、朝夕仏さまにおいのりをしました。そのおかげで、船に弱いはずの亀吉さんが、船酔いをすることもなくなり、一人前の漁師になりました。こんなことがあってから、近くでも評判^{ひょうばん}にな

り船酔いを止める仏さんといわれるようになりました。
(『やいづの昔話』より)



一本松

(田尻北)

吉永街道から、すこしはずれたところに、しゅうい一メートル、樹齡^{じゅれい}三百年といわれる松の木があります。家なみが、まだ吉永街道ぞいに、点々とあり、木屋川と海との間にあったころです。

さくさいという人が、じぶんのやしきの一本の松のそばに、津波や地しんを心配して、おはかをたてました。

それから、だんだんとおはかがふえ今では、たくさんのおはかになりました。

昭和二十七年ごろまでは、なくなった人を火そうにしないで、うめていたので、人のれいも出たということで、人の話にも、よくのぼりました。

このふきんは、田んぼばかりで、目じるしになるものがないため、その一本松を、有名にしました。

太平洋戦争中には、一本松を中心に、おうぎ形に線を引き、地図を作ったといわれています。一本松は、さぞかしうれしかったことでしょう。



歴史を見つめてきた一本松

五輪さん

(石津)

五つの石を塔のように積み重ねたものを、ふつう五輪塔とよんでいます。金属や木でも、つくられました。

下から四角、円、三角、半月、宝珠などの形をしていて、昔から供養（なくなくなった人をおまつりする）とか、お墓として使われてきました。

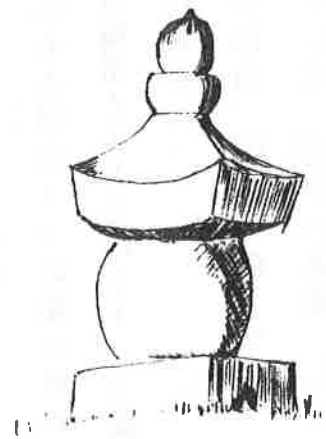
石津地区にも、土地の人から「五輪さん」とよばれ、多くの人たちに、昔から大切にされてきた五輪塔があります。昔は、たくさん各地にあったと思われませんが、今では、見かけることが少なくなりました。

石津の「五輪さん」には、次のようなご利益やくがあるといわれています。

女の人が病気になった時、早くなおるようにおまいりをし、「その願いがかなえられた時は、必ず感謝かんしゃのしるしに赤い絹糸きぬいとを、五輪さんの上にかけますよ。」とやくそくをすると、はやくなおるといふのです。

「石津の五輪さん」は、「天あまの神」とか「地じの神」ともよばれています。

毎年、八月十六日がおまつりの日です。



五輪塔

花火地蔵

(下小田)

今から三百年位前に、花火じょうが建てられました。小さな子どもがすこやかに育つように、慈悲じひの心が育つように、という願いから建てられたおじぞうさまです。

子どもの夜泣き、かんの虫を治なおすために、まつってある石をかりて、まくらの下に入れたり、そのまくらの上にねかせたり、石に生年

月日と氏名を書いてお願いしたりしました。

しかし、お祭りをしなかったり、花火じぞうにいたずらすると、その年は作物がとれなかったり、病人や死人がたくさん出るといわれるようになりました。

そこで花火をたくさん打ち上げてお祭りすることになりました。

今でも、毎年八月二十四日にお祭りが行われ、大勢の人が集まります。



道のそばにある花火じぞう

二、史話

水天宮さん (石津)

四月五日は、石津の水天宮さんのおまつりです。

この水天宮さんは、今から百二十年ほど前、江戸時代の終わりごろの、文久二(一八六二)年に、九州の久留米にまつられていた神様を分けてもらって、この石津の地におまつりしたものです。

この神様は、船に乗る人たちをまもってくれる神様として、土地の人たちからたいへん信仰されています。

さて、この水天宮さんといわれる神様は、

言仁尊ことひとのみこと(安徳天皇)のことです。この神様を

ここにまつたことについては、こない

つたえがあります。

安政三（一八五六）年の春、江戸の材木商人の野口庄三郎と、手代の伊藤吉弥が、ご用材（ばくふが使う材木）を集めるためにこの地へ来ました。

信州（今の長野県）から、大井川をくだり、木屋川を利用して木材を流し、石津荆島の貯木場（木材をためておくところ）に集めて、石津港から江戸へ送っていました。

ところが、その年の八月二十五日、大あらしがやってきて、この貯木場はこわされ、山のように積んであった材木は、全部流されてしまいました。

野口、伊藤の二人の商人や、村の人たちはあわてました。

そして遠い九州の久留米の地にまつられて

いた、水天宮さんにおいのりをしました。

するとふしぎなことに、風向きが一夜のうちに変わって、流された材木が全部近くの岸に打ち上げられました。

この神様のお助けに喜び、商人や村の人たちは相談して、新しくつくる貯木場のところへ水天宮さんをまつることにしました。

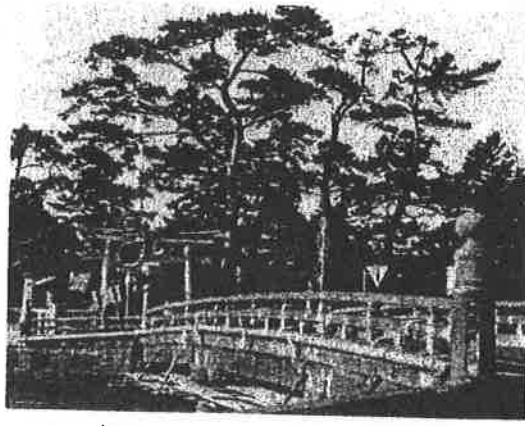
そして、文久二年、江戸の野口庄三郎の手代の田中藤右衛門という人が、久留米藩主の有馬氏の屋しきから、水なんよけの神様を分けてもらい、ここにまつりました。

それから後は、水なんよけや、安産の神様として信仰を集めています。

なかでも漁師たちの信仰があつく、漁が少ないときは、おふだを、竹のつつに入れて海へしずめたり、海に物を落したときは、お

ふだの流れた方向をさがすと見つかるといわれるなど、豊漁や海の安全を守ってくれています。

(『やいづの昔話』より)



木屋川のとりにたたずむ水天宮

幸助橋のゆらい (田尻北)

幸助橋は、木屋川にかけられている橋の名前です。木屋川には、水天宮前と橋本のところに橋がありますが、その二つの橋の間にある橋が幸助橋です。

幸助さんという人の名前をとって名づけました。橋ヶ谷幸助さんは、今の橋ヶ谷真一さんの先祖にあたる人で、明治の初めころ、田尻北岡の方から、分家して、幸助橋の前にある真一さんの家をたてました。その時、自分の財産を出して、木の橋をつくりました。

幸助さんの家には、一本松近くまで田んぼがありました。田んぼへはたらきにいったりする時には、どうしてもこの橋が必要だったのです。

今から三〇年前ぐらいに、当時の木の橋から今の石の橋にかけかえられたそうです。

橋には、昔から手すりがないので、川に落ちる子もいたそうです。そんな時には、青松葉を、無理に口に入れさせて、さかさにして、のんだ水をはかせたそうです。

夏は、水あそびにもってこいの場所になりました。たらいを川上から入れ、橋の上からそのたらい目がけて、とびこんだりするものもたのしいあそびでした。

また、幸助橋ふきんの木屋川には、たくさん、さかなもいたそうです。いけすをあちこちにつくって、その中へさかなを追いこんでつかまえました。

いけすの作り方は、石やぎるの大きなものをうめて、石をおくのです。干潮かんちようの時に、いけすに行くと、えびやうなぎが入っていました。このえびは、海のさかなのすきなどをつる時の、とてもいいえさになりました。

橋の下の橋げたに、木の箱に入れてにげないようにふたをして、飼っておくと、えさをほしい人が買いに来てくれて、けっこう子ど

もたちのおこづかいになったそうです。

松の小道こみち (石津と田尻北)

石津の海岸は、昔から台風が、近くを通るごとに、大波がおしよせたり、潮風にふかれました。農作物が、大きな被害をうけました。そこで、当時この地方をおさめていた田中たなか藩はんに、防風林や堤防を作ってほしいと、人々は、いつもおねがいをしていました。

特に、天保七年てんぽう（一八三六年）八月には、大暴風雨がおそい、農作物がだめになってしまいました。そこで、当時の殿様とのさまの本多正寛が植林をゆるし、お金を出してくれました。また村人達は、十数年以上の年月をかけて、堤防を作ったり、植林をして、波から村々を守り

ました。

これによって、潮風の害も少なくなり、生活も楽になってきました。

このようにして、江戸時代に植えられた松

は、今では、

大きな松並木

となって防風

林やいこいの

場所として、

土地の人たち

に親しまれて

います。



今でも残る松並木

馬頭観音（田尻北・石津・下小田）

頭に、馬のかんむりをのせた石づくりの、

かんのんさまです。馬は田畑をたがやしたり、



（下小田）



（石津）

荷物を運んだりして人を助けたので、かい主が、供養のためたてたものです。

市内各所に残されていますが、そのうち、田尻北（浜）にある馬頭観音は、むかし、戦争があったころ使った馬を供養したものです。

兵役を終え、浜にほうむられた馬たちを供養するために、今も、一年に一回「おしょうや」というものをやるそうです。

木屋川 — 木材の道 — （田尻北と石津）

木屋川は、大井川から分かれた川で、島田市細島の木屋水門から藤枝市を通過して石津に流れてきていました。

この水門の名前をとって、木屋川と名づけられたと言われています。

安政三（一八五六）年の春、江戸（今の東京）深川の材木問屋・野口庄三郎と伊藤吉弥が、幕府が使う木材を集めに石津にやってきました。

二人は、信州（今の長野県）で、切り出した木材を、大井川から木屋川を流してはこび、石津の荆島に集めて、江戸へおくりました。

このように、木屋川は木材をはこぶ大きなトラックや広い道がなかったころ、木材をは



水天宮境内にある御用材置場の石碑

（文久元年11月）

ぶんきゅう

こぶ道としてたいへん役に立っていたのです。

その後、木屋川は安政の大地震や海岸の變化によって川口がふさがれてしまったため、九十年位前に新しくつくられました。

土地改良の記念碑（田尻北）

田尻北公会堂のそばに建つ石碑は、土地改良（用水路や排水路をつくって、田畑を作り直すこと）を記念して、昭和三十四年五月に建てたものです、

今は、川や用水路は、コンクリートできちんと作られて、雨のときも水があふれてしまふことは、ありません。

しかし、むかしこのあたりは、長い間雨が降ると、きまって栄田川の水があふれだし、まわりの田んぼや畑に広がり、一面水びたし

になって、道路もわからないほどになってしまいました。農家は、大きな被害を受け、人々は苦しみました。

そこで、人々は、集会をたびたび開き、相談しあって、まず組合をつくり、この土地を流れるいくつかの川をつくりかえる計画をたてました。

県の役所に書類を出してお願いをし、昭和二十五年十一月に許しをもらうとすぐに工事にとりかかりました。

工事は、毎日毎日、どろと水との戦いで、多くのお金がかかり、なかなか進まなかったといわれます。しかし多くの人々の願いと努力で、工事ははじめてから九年目に、ようやく、すべての工事が終わりました。九年間の工事の苦労は、その後の人々のくらしを

支えるもとになったのです。



人々の苦勞がきざまれた記念碑

山梨恵吉の石碑 (田尻北浜)

田尻北浜の公会堂横にある高さ約二メートルの大きな石碑は、田尻北浜の海で、初めて大敷網おおしきあみ（今の定置網ていぢいち）を行い、その土地の人々のためにつくした山梨恵吉を記念してたてられたものです。

大敷網が行われる前は、しらすやいわしを

とる地曳網じびきあみがおもに行われ、そのほか和船（帆はや櫓ろで進む日本式の船）に乗って遠く伊豆の大島や神津島こうすじままででかけるかつおの一本釣りや手ぐりあみ（船からつり糸をたらし、手で引き上げる）などがありました。しかし魚のとれ高やねだんがいつも決まっていなかったなどから、くらしを支えるため、昼は田畑の仕事をし、生活は楽ではありませんでした。（半農半漁はんのうはんぎよの生活）

その頃、恵吉は、「うらちょうのおやじ」といわれ、みんなからたよりにされていた浜の代表者でした。

明治四十五年（一九一二年）頃、高知県こうちの高橋長次郎が、この土地に来て、魚の種類しゅるい、潮流、水温を調べて大敷網にちようどよいから、浜を貸してほしいと話をもちかけた。

地曳網をしている人々は、大反対をしましたが、恵吉は、みんなのくらしをよくするためと、熱心ねっしんに話をし、賛成さんせいをしてもらうよう努力をし自分の田畑たはたを売って仕事に必要なお金をつくりました。

恵吉のねばり強い努力によって、田尻北浜の漁師たちは、この仕事をすすめました。



山梨恵吉の石碑

木屋川と人々のくらし (一)

第二次世界大戦が終わって、しばらくは、朝、川でせんとくする人のすがたが、木屋川で見られました。今でも、川へ下りるかいだんがあり、昔のなごりをのこしています。

この木屋川は、大正時代までは、人々が泳いだり、しじみをとったりでき、とてもきれいにすんだ川でした。

戦前、この付近は、水道がなく、ポンプといて、地下水を手でくみ出す機械きかいを使っていました。夕方になると、ポンプを手でおいで（ポンプの柄えを上下に動かす）、水をバケツに入れ、ふるまで運ぶのが子どもたちの仕事でした。

また、和田浜へ行くと、かまどへくべる（入れて、もやす）河原木りゅうぎ（流木）を集めて

いる子どもたちの姿もよく見られました。

子どもたちは、きそって、ふるたきやごは
んたきに使うたき木を集めるので浜は、今の
ように流木はなく、もちろん、缶^{かん}やプラスチック
クなどの入れ物も流れてきませんから、とて
もきれいでした。



人々のくらしを見つめてきた木屋川

しかしながら、台風のとなどには、たく
さんの流木が
流れつくので、
中学生ともな
ると、遊びを
かねて、まだ
浜に流れつい
ていない河原
木を、海に入
っていった、

とったりもしたようです。

木屋川と人々のくらし (二)

戦前(第二次世界大戦)ころまでは、きれ
いな川で、しじみがすみ、竹でいけすを作り、
そこであなぎを飼って大きくしたりした。昭
和一桁^{けた}ぐらいの年ごろまでは、づがに^{づがに}という黒っ
ぽいかにもいた。体は、七、八センチメートルで、
毛の生えた大きなつめをもっている。大雨の
降った後、橋の上から四ツ手という大きな四
角の網を水の中に入れてとり、ゆでて食べた。
また、田尻北の浜でも、海側と川側では、
風習が違うこともある。川側の人たちは、七
夕の日に、女の人は、木屋川の水で髪^{かみ}を洗う
と、髪がきれいになるといわれて、髪を洗っ
たという話も伝えられています。

戦後も竹で作られた入口のせまいつつをうげという道具でしかけておき、うなぎをとった。ここ十年ぐらいで澄んでいた水が、にこってしまつたことは残念です。

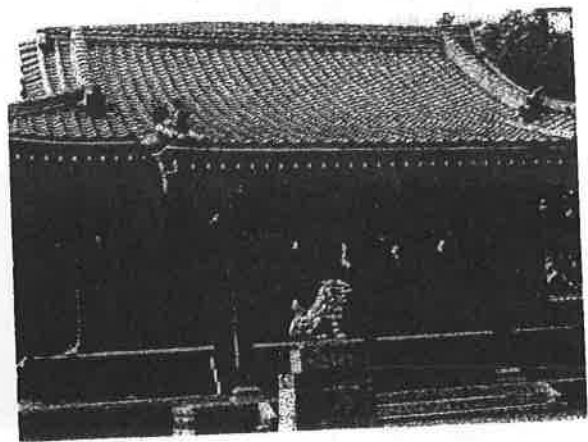
石津八幡宮 (石津)

八幡宮の祭神は、「誉田別尊」と言い、武士の神様、また古い事では、安産の神さまともいわれています。

お祭りは、十月十九日です。本殿の向かって左に三つのやしろ、向かって右に、一つのやしろがつくられています。

八幡宮が建てられたのは、室町時代で、今から約百五十年前のことです。

神社を建てるために、七人衆といわれる人たちが、自分の田畑や、財産を出し合つたと伝えられています。



石津八幡宮

吉永街道 (北新田—下小田—石津)

吉永街道は、明治四十二年(一九〇九年)県道として開通しました。志太郡(焼津市、藤枝市、島田市、大井川町、岡部町)の南部の主な道路として、吉永(現大井川町)と焼津をつなぎました。

道路は吉永、静浜(現大井川町)、田尻、北新田、下小田、石津をとおって、焼津の駅

につながる道で、大正九年（一九二一年）ごろから、焼津駅から吉永をむすぶ駅馬車が、朝三回、昼から三回往復していました。

まだ自転車もない時なので、その馬車をつかって、吉永や焼津駅の方へ出かけていきました。とてもよくみんなに利用されました。

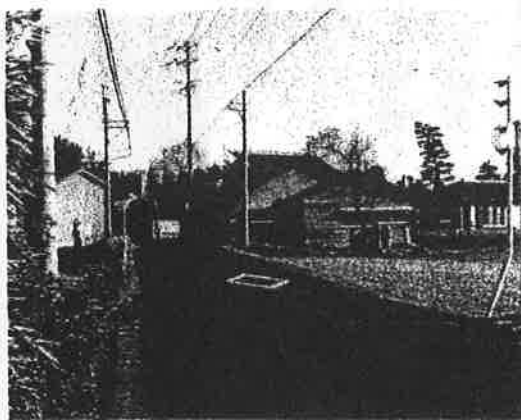
その後、馬車にかわって、乗合自動車（今のバス）が通るようになりました。

第二次世界大戦のころ、ガソリンがないので、木炭をたく、かまをつけて、黒いけむりをはいてすすみました。そして坂のところに来ると、登れなくなってお客さんがおりて、あとおしをしました。

また、吉永街道と、榛原街道の間に、池谷街道という道がありました。むかし焼津の南のていぼうをつくるための石を大井川

の河原から、トロッコではこびましたが、その時この道をつかいました。

今、この道は国道一五〇号線できられてしまっています。



むかしのおもかげをのこす吉永街道

ふるや さだきち
古谷定吉

（下小田）

― 名を道生、通称定吉、のち節右衛門 ―

江戸時代末ごろの算学者である古谷定吉は、

文化十二年四月三日（今から約百七十年前）

ろ)、農家の四人兄弟の末っ子として、志太郡和田村(今の焼津市)に生まれました。

小さいころからそろばんが好きであったと伝えられ、農業の手伝いをしながら、算学を自分で勉強しました。

その後、田中藩(今の藤枝市におかれた大名)に奉公している時、藩の学者であった岩本源兵衛常師の助手となり、これをきっかけにして、算学の指導を受けるようになりました。

源兵衛は、定吉のすぐれた才能と学問に対する熱心さに感心し、いろいろな学問を学ばせました。

天保三年(一八三二)、岩本源兵衛のすすめで、当時江戸の算学者であった長谷川善左衛門寛に教えてもらうため、江戸に上りまし

た。

江戸では、長谷川氏に入門しながら勉強にはげみ、友人の大穂徳治と親しくなりました。数年間、江戸で学んだあと、和田村に帰りました。ほどなく九州の福岡に大穂徳治をたずねて、大穂の先生にあたる久間太六に弟子入りしました。太六からは、測量・天文・暦法について学び、天保十三年(一八四二)には、免許状を受けるほどになりました。

……古谷定吉略年表……

嘉永四年(一八五一)

古谷数学道場を開き、門人に算学の教授をした。

安政元年(一八五四)

「算法通書」三冊を完成させた。

安政二年(一八五五)

田中藩士となり、数学の教師となった。

明治元年（一八六八）

藩主の本多氏が、千葉県に移されたので、築城の測量に行った。

明治五年（一八七二）

門人名簿をつくった。（古谷社中）

明治六年（一八七三）

東海道宇津谷トンネルの測量を、自分の作った測量機でやりとげた。

明治八年（一八七五）

地租改正のため測量をし精密な地図をつくった。

明治十年（一八七七）

東京深川に数学指南所をつくった。

明治十一年（一八七八）

「算盤早伝授」二冊を完成した。

明治十六年（一八八三）

「算盤早伝授」三冊にして再発行した。

明治二十一年（一八八八）

下小田の古谷算学道場で病気のためなくなつた。



算学道場跡にある記念の石碑
(下小田)

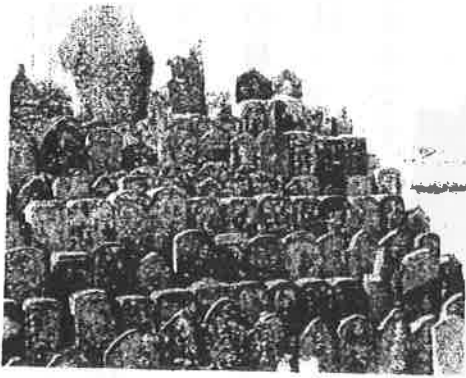
無縁仏（下小田）

むかしから、田んぼや畑に、馬や牛や人間をまつた石の仏が立っていました。

こうした石の仏は、だれの物かわからず、長い間、供養くようされることもなく、そのままほおっておかれていました。

その後、耕地整理こうちせいりの時、今の下小田の公会堂の所へ、一か所に集められることになりました。そこは、小高い土地で、坂を登る細い道が一本だけひっそりと通っていました。

今では、その小高い土地も、なくなってしまう



無縁仏

いましたが、無縁仏としてあつくほうむられ、年に一度、八月の半ばごろ食べ物やおせんこをあげて、供養が行われています。

栄田川

もとの名前は、井戸川とよばれていて、それを飲み水にしていたぐらいきれいでした。

わき水で、温度が一定していたため、夏は冷たく感じ、冬はあたたかかったようです。

また、川はばは今のようによくはなく、とても、はばのせまい川でした。また、ふななどもいて、食べることができたといわれています。

昭和二十六年（一九五二）、田んぼの地形をかえたり、川を広くする耕地整理をしまし

た。その時、柴田神社の横にそって流れるようになったので、「さかえだ川」と、よばれるようになりました。

この時の耕地整理は、村の人たち全員が出て、きかい機械は一つも使わないで、シャベルで全部やったそうです。



水のきれいな柴田川

道しるべ石 (下小田)

むかしの道を歩くと、四つ角とか二つに分

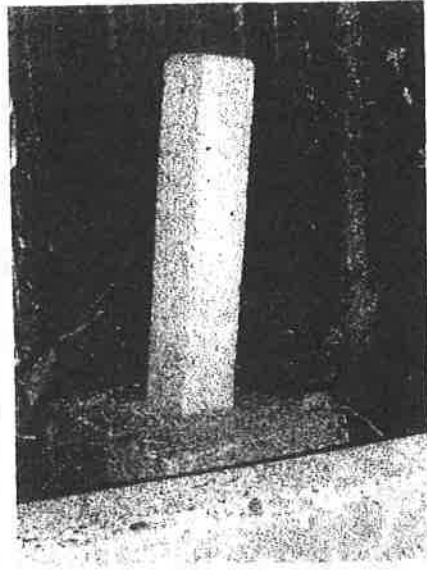
かれる道などのそばに、文字を彫りこんだ石が立っています。その文字からは、行き先を示す地名を読みとることができます。このよ
うな石を、道しるべ石とか道標どうひょうと呼び、今の案内標識あんないひょうしきの役目をしました。

道しるべ石は、その場所や行き先の地名とか道のりを示して、人々の通行の手助けをしました。

港小の学区内にも、むかしの道が残り、分かれ道の角に、道しるべ石が立てられています。しかし、今は、二つしか残されていません。そうです。そのうちの一つが、下小田の花火地蔵さんの近くに今も残っています。

四角な石の柱（高さ七十五センチ、幅約十センチほど）で、四つの面に、次のような文字が、今でも、はっきり読めます。

東 田尻北海岸ニ至ル
 西 焼津 吉永線ニ通ズ
 南 北新田ヲ経テ田尻ニ至ル
 北 小川村石津ヲ経テ焼津町ニ至ル



昭和5年ころたてられた道しるべ石。

鳴子なるこの松 (道原どうばら)

今から三百年ほど前の話です。

元禄十二年(一六九九年)八月十日ころからふり出した雨は、だんだん強くなり、港の

入り口は波でせき止められ、川や田は水がふえ、村人たちは心配でたまりませんでした。

十五日の夕方のことです。急に雨がはげしくなつたかと思うと、とつぜんたくさんの雷が一度に落ちるような地ひびきと、大きな音がして津波つなみがおしよせてきました。

第一の波は会下えげのしま之島(今の小川港のあたり)へ、第二の波は田尻村たじりむらへ、そして第三の波は石津村いしづむらへと、すべてをのみこむようにしてせまってきました。

村人たちは、われもわれもと、西の与惣次よそじの方ににげ出しました。

もちろん、何ひとつ持たず、若者は年寄りとしよりの手を引き、母親は子を背おい、みんな必死でした。

そのころ、大井川の土手に大きな松の木が

一本、高くそびえていました。すぐ後ろにせまる波に、村人たちはあらそって木によじ登り思い思いのかっこうで、枝にしっかりとだきついて波をよけました。

そのかっこうは、遠くから見ると、ちょうど、すずめおどしの「鳴子」^{なるこ}（板に小さな竹のつつをたくさんつけ、鳴らしてすずめをおどしたもの）のようだったので、その後この松を「鳴子松」とよぶようになりました。

しかし、この松も、としをとり、かれてしまい、しばらくは名ごりを残す芝地だけがありました。

村人たちは、記念に松を植え、それも今では三代目の松となり、国道一五〇号線のわきに育っています。りっぱな石碑もいっしょに建てられています。

この松の名の由来^{ゆらい}についてこんな話も伝わっています。

寛延四年（一七五二）八月十九日、この地区をおそった台風のため、海はあれくるっていました。

今のようにがんじょうな堤防などなかったころですから、大波は民家にまでせまり、とうとう多くの家が波にさらわれてしまいました。

いちはやくにげた人々の中には、近くの松によじのぼって助かった人もいましたが、女の人や、子ども、年よりの多くは、とちゅうでつかれはてて、波にのみこまれてしまいました。そのようすは、この世のものとはおもえず、たすかった人々もおそろしさに皆^{みな}泣きわめきつつ、松にしがみついています。

その泣きわめいているようすから「泣るこの松」ともよばれるようになったということです。

小川高等小学校跡の石ひ（石津岡）

明治五年（一八七二年）に学制が發布され、石津・与惣次と和田村がいっしょになって、学校をつくりました。しかし、生徒の数がふえた事などから、明治十六年七月十五日、石津岡公会堂の前に新しく校舎がつくられましたが、これが小川高等小学校のはじまりです。小川高等小学校は、尋常小学校を卒業した人が行く学校で、四年間、ここで勉強しました。この学校には、小川・和田・大富・焼津のそれぞれの尋常小学校の四年間をおわった人たちが入学しました。そのころ高等小学校が

あったのは、小川と、静浜（今の太井川町）、西益津（今の藤枝）で、たくさんはありませんでした。

月謝が三十銭という事で、そのころ男の人が一日働いてもらうお金がそれぐらいだったそうです。だから、誰れもが行けたわけではなく、今の大学へ行くぐらいの人しか行けなかったそうです。

そのころの成績表は、一人一人にその人の成績がわたされるのではなくて、全員の成績がわかるように印刷してわたされました。だから、他の人の成績もわかってしまいます。そのころは、落第というのもありました。なかなかきびしかったことがわかります。

石津では、明治十年五月に不岩院をかりの校舎として、石津学校をつくりました。明治

十六年には、新しい校舎を建てました。しかし、明治十九年には、小川小学校といっしょになり、その分校として、一、二年生だけが勉強しました。明治二十五年になると全員が小川小学校にうつり、志太益津高等小学校の小川分校になりました。

明治二十五年、今から九十年前にできた小川高等小学校あとの石碑が、石津岡の公会堂の横に残っています。



小川高等小学校あとの石碑

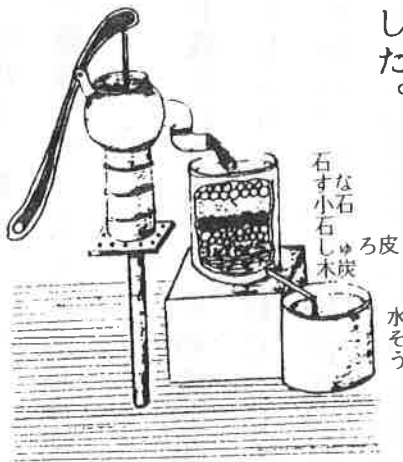
むかしの水のとり方 (石津)

水道がまだできなかった頃は、どの家でも、手押しポンプがあり、地下水をくみ上げていました。

しかし、地下水には、金気があってそのままでは、飲めません。

そのため「こしがめ(漉し瓶)」に入れてきれいにしました。

しかし「こしがめ」では、長い時間がかかり、一度に多くの水が必要とする時は、大変こまりました。



手押しポンプとこしがめ
(「焼津市社会科副読本」)

特に風呂の水は、バケツに入れて何回も運ばなければなりません。

せんたくには、その水をなんばいも大きな木のたらいに入れて、洗たく板を使い、手でごしごし洗いました。

このような生活は、昭和三十一年八月ごろまでありました。

(「小学校社会科副読本」参照)

むかしの漁法 (石津・田尻北)

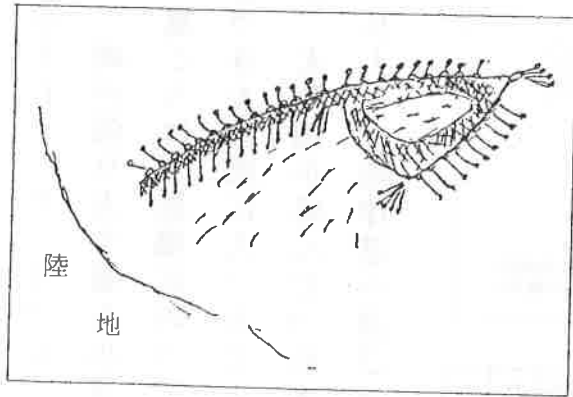
大正時代の初めごろ大敷網おおしきあみ(定置網ていぢあみの一つ)が行われるまで、この地区の人々は、田畑で作物を育て、漁業で地曳網じびきあみを行うなどの生活をしていました。

地曳網は、『手ぐり網』とも言い朝と晩の二回ほど、網を入れ、たい・ひらめ・かれい・

あじなどがとれました。しかし、一年間の収入は、それほど多くなかったのです。

地曳網は、昭和十年(一九三五)頃までは、さかんでしたが、今は少なくなりました。そのほか、一本釣りやしらす漁も行っていました。

大正二年(一九一三)に、高知県の高橋さ



大敷網の図(鳥瞰図)

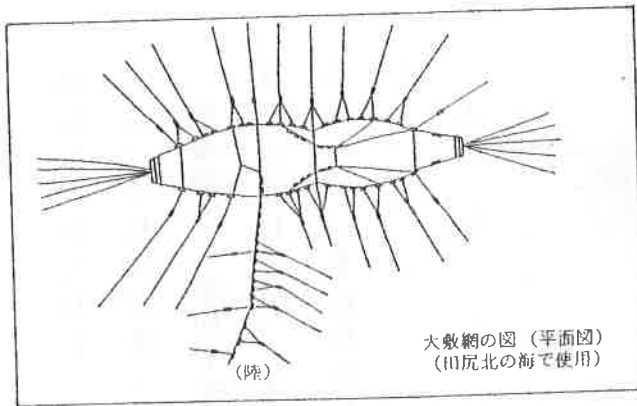
んが、海底の地形・水温・潮流ちゅうりゅう・魚道を調べ、大敷網を沖合に設けると、地元の人々は、現金収入の道を考え、雇やわれた人も多かったですと伝えて

います。手ぐり網に入る小魚も、大敷網にかかったので、大敷網の漁獲高も非常に上がりました。

大敷網は、昔は、一年間ずっと網をはっていましたが、今は、費用とか魚のとれる時期も考えて、一月から五月、夏（夏あみ）と秋（秋あみ）に行っています。船には、十人ほどの漁師さんが乗り、網に入った魚を上げる時、小魚はたもですくい、大きな魚は、カギのついた棒を使います。

網を張ったり、網を上げる時は、昔は、浜に櫓を組んで、潮流を見て判断し、「ほら貝」をふいて人を集めたといっています。

大敷網の仕事には、昔は、六十人から七十人くらいの大人数でかかり、朝と晩の二回あげると、ぶり・さわら・いか・あじ・さばな



どがとれました。今では、漁師さんの数もへり、網の張り方や量も小さくなっています。夏ごろは、黒潮にのって、かつおが海岸に近づき大敷網に入ったこともありました。また、大敷網が盛んだった大正年間の頃は、ブリが入り、焼津港へ運びきれず、浜に山積み

魚	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ぶり		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
さわら			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
いしだい				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
あじ			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
かわはぎ				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
ひらさば				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
ごまさば				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
うずわ													
めじか													
かます													
たちうお													
ほうぼう													

大敷網でとれる魚の種類と時期

にしてあったと語り伝えられています。

今は、かつお船やさば船は、年中出漁しますが、昔は、冬になると、海があれするため、船を浜に上げ、春を待ちました。

かつお船は、木造船で、約三十人ほどが乗り組み、伊豆沖の海まで出かけ、一本釣りで、かつおをつりあげました。

沖網おきは、昔は二人（夫婦）で行っていました。今は、機械を使い、一人でもできます。主にひらめ・えび・伊勢いせえび・まぎすなどをとっています。

塩づくり (石津・田尻北)

昭和二十一年から二十三年（一九四五～一九四七）頃まで石津浜で、塩づくりが行われました。

太平洋戦争で日本が敗れて、生活するのに大切なものが、不足していたので、自分たちの手で、それを作ったり、売ったりしてくらしていたのです。

生活になくはならない塩は、江戸時代より明治時代の中頃にかけて、どこの海岸でも、作られていました。

塩づくりの方法は、海岸を一畝いっせ（約百平方メートル）の広さ毎ごとに区切くぎって、厚さ十センチメートル位に砂をしきつめ、塩田（または塩畑）をつくります。そこに朝早くから、海水をまき、午後一時ごろまで、ほして、砂に塩分をつけます。

この塩のついた砂を集めて、こしきに入れ、さらに上から海水をかけて、こい塩水をつくらします。

それをにつめて、塩にし、わらであんだ、かごのようなものに入れてつるして、にがり（海水の中にとけている塩よりほかのもの）を取り去り、食塩を作りあげました。

大変だった川口ほり

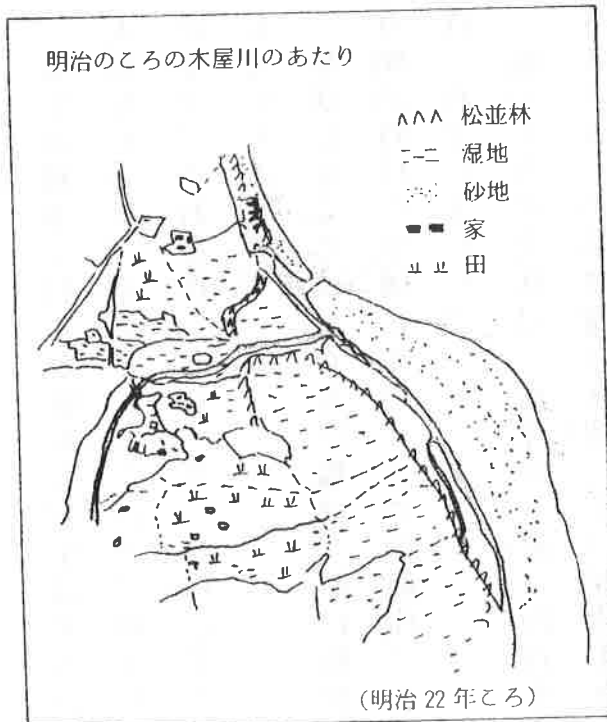
木屋川の川口は、江戸時代より、木材を運び出す港でした。そのため、いつでも使えるように掘っておかねばなりません。しかし港の口があいていれば、それだけ海水が入って来るわけです。

特に台風が、おそってくるとたっぷり田の中に海水が入って、川口がふさがれてしまうので大へんでした。稲が海水につきり、全めつしてしまふからです。

このようになると、どうしても川口を掘り

あけなければなりません。台風の中を村中の人びとが全員、みの・かさを着て、すき・くわを持ち川口に出て、台風の大波とたたかいながら、砂やじゃりを取りのぞき川口を掘りあげました。

台風のおそってくる八月から九月ごろには、毎年二、三回は必ずあったということです。



この仕事は、江戸時代の一六六四年ごろより、昭和二十六年（一九五五年）ごろまで続いたということです。

（『石津共栄会誌』を参考にしました）

イタチをつかまえた話（北新田）

最初に私が見たのは、今から八年ほど前です。

ある日、道路わきのみぞの中をすばしっこく走っていくこげ茶色の姿を見つけたのです。それから、数回、近所の家の庭や、道路を横切る二匹づれを見ました。

このごろ、近所の方が、ねずみとはちがう「キキキ」という鳴き声が聞こえるというので、ねずみ取りをかけました。すると、つかまったのは手の平に乗るほどのイタチの赤

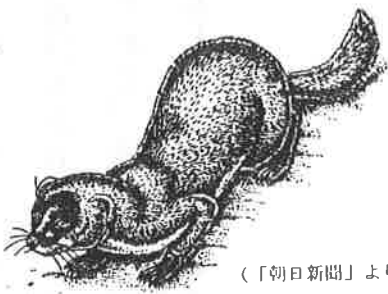
ちゃんでした。夕方私は、二人の子供をつれて見にいきました。最初、イタチは人間をこわがっていましたが、ほどなくなつき、平気で手の平に乗るようになりました。

その家では、イタチをポリ容器に入れて飼っていたところ、親イタチが現われ、容器のふたをかじり始めました。最初は、人間を見ると、さっとにげましたが、容器にすきまをつくるため、なかなかにげようとしなくなりました。そのうちに親はとうとうかじって穴をあけ、子どもをつれだし、姿を消してしまいました。

※日本に住むイタチには、チョウ

センイタチとホンドリタチとがあり、桜井さんが見たのはホン

ドリタチと思われま



（「朝日新聞」より）

三、むかしのあそび

めんこ（面子）

めんこというのは、直けい七、八センチメートルの丸い厚紙のものや、たて四、五センチメートル、横七、八センチメートルの長方形の厚紙でできているおもちゃです。主に小学校低中学年の子どもの遊びでした。

表には戦争の絵や、すもうとりなどの当時のスターの絵が、きれいな色でかかれていました。これを四、五人で、数枚ずつ出し合い、全部を重ね合せて積み、これに一枚のめんこをななめ上からいきおいよく打ち当てて、決められたもの一枚だけ地面に取り出します。このようにして、取り出した人が、全部のめんこをもらう遊びでした。

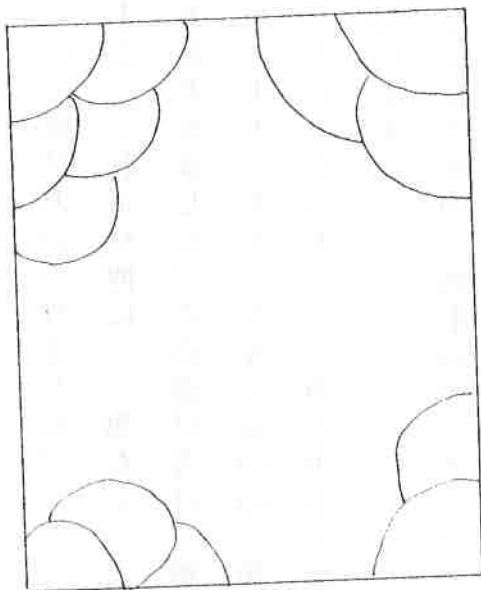
また、二人でおたがいに一枚ずつ打ち合い、うらがえしにして取り合う遊びもありました。

このめんこを強くするために、ろうや石けんをぬりつけておくことをした子どももいました。

じん（陣）取り

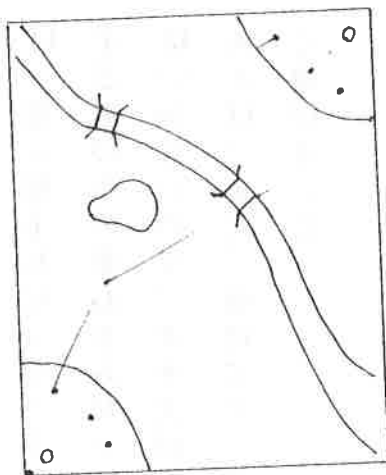
地面に適当な円をかいたり方形をえがき、その中に自分の陣をどれだけ広くとるかという遊びです。例えば四人でやるとすると方形を描き、角を決めてしゃがみます。じゃんけんをして、勝ちの人は親指をその角にとめて手をひらき、おうぎ形を地面にかきます。また、じゃんけんをして、勝つとそのおうぎ形のどこかに親指をとめて、またおうぎ形をかきます。

このほか、雨あがりで地面がしめっている時は、長いくぎを強く打つように放ってその穴をむすんだ陣とりも男の子たちは好きでした。くぎがぬけてしまうと、とれないで負けるので、腕に力を入れてふる。腕力の強い子が英雄的になり、みんなに認められるのです。



飛行機

一枚の紙切れのすみに場所を決めて、鉛筆のしんをたて、上部を人さし指でかるく押す。



鉛筆が線を描いて消えたところからまた、じゃんけんで勝つと同じようにしんを立てて線をえがく。その先が相手の陣に入ると勝ちとなる戦争ごっこがある。相手をじゃまして陣に入れないようにしたりして、工夫して遊ぶ。くぎを地面にうちつけてやる工夫もしたり、アイデアで楽しむことができますので、時を忘れて勝負する。人数がいろいろでも、工夫して仲間はずれにしない。

カッチン玉

カッチン玉という遊びは、直けい一センチメートル（大きいものは、二センチメートル）くらいの大きさのガラス玉を打ち当て、取り合う遊びです。

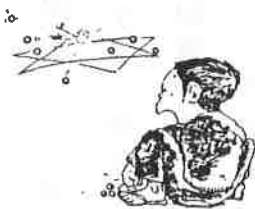
その遊び方の一つに、めんこと同じように二人で打ち当て、当てた方が、その玉をもらうという遊び方がありました。

また、これより他に「三角だし」という遊び方がありました。この遊び方は、地面に一边が三十センチメートルぐらいの三角形をかき、その中に一人、三、四このガラス玉を出し合います。

こうしてその三角形の中にある、ガラス玉へ、自分の玉を当て、三角形の中から出すと

いう遊び方があります。この時、玉が三角形より出ないで、逆に自分の玉が中に入ってしまったら、それで、その人は終りになり、玉を取られてしまうのです。

このようにして、玉を出来るだけたくさんとったものが勝ちです。そうして、玉をたくさんもっている子が、いわゆるガキ大将でした。でも、友だちの玉をみんな取ってしまったら、遊ぶ相手もなくなってしまうし、小さな子どもものをむやみにとってしまうわけはいかないので、ガキ大将は取ってしまったあとは、また、分けてやって、みんなで楽しく遊びました。



四、わらべうた（童歌）
わらべうた

むかし
昔から子供たちに歌いつがれてきた歌のと。わらべうたは、子供が遊びながら歌うので、リズムをともない、ゲームにあったことばとなっている。例えば、なわとび、まりつき、お手だまをする時になどに歌われている。

花いちもんめ

勝って　うれしい花いちもんめ
負けて　くやしい花いちもんめ

あの子が　ほしい

あの子じゃ　わからん

この子が　ほしい

この子じゃ　わからん

丸くなってそうだん（丸くなって相談する）

①

なわとびうた

おおなみこなみ
高山こえて

ひく山こえて

一、二、三

②

ゆうびんやさん

ゆうびんやさん

おはいんなさい

はがきが(三)まい　落ちました

ひろってあげましょ

一まい、二まい、三まい……

ありがとうさん

③

一わのからすが

カーア カーア

二わのにわとり

コケコッコー

三びきさかなが

およぎ出す

四は、しらがの

おじいさん

五は、ごぼうび

ありがとう

ほら、いちぬけた

ほら、にぬけた

.....
.....

おじゃみうた (お手玉)

①

一に 水仙すいせん

二に かきつばた

三に かざりふじ

四に ししぼたん

五つ 五山ごさんの千本ざくら

六つ むらさき

七つ なんてん

八つ 山ふぶき

九つ 小ざくら

十で とのさま

あおいのごもん



一 れつ

らんばん はれつして

二 ちろせんそう

あいにけり (はじまった)

三 っさと にげるは

ロシアの兵

四 んでも つくすは

日本の兵

五 万の兵を ひきつれて

六 人のこして

みなごろし

七月八日の

たたかいは

ハルピンまでも

せめおとし

九 ロバトキンの

首おとし

十 とう 大将

ばんばんざい

手あそび

ずいずいずところばし

ごまみそ、ずい

茶つぽにおわれて

とっぴんしゃん

ぬけたら

どんどこしょ

たわらのねずみが

米くってチュウ

チュウチュウチュウ

おとっさんがよんでも

おかつさんがよんでも
いきっこなーしよ
いと
井戸のまわりで
お茶わんかいたの
だあれ

子守りうた

お月さんいくつ
じゅうさん七つ
まだとしゃわかいに
あの子をうんで
おまんはどこいった
あぶら買いに
茶買いに
あぶらやの前で
あぶらいっしょうこぼした

太郎^{たろう}どんの犬と次郎^{じろう}さんの犬と
みんななめてしまった
その犬あ、どこいった
たいこにはって
たたきつぶして
しいーまった

手まりうた

①あんたがたどこさ
あんたがたどこさ
肥^ひ後^ごさ 肥^ひ後^ごどこさ 熊本^{くまもと}さ
熊本^{くまもと}どこさ 仙波^{せんば}さ
せんば山には
たぬきがおってさ
それを りょうしが
てっぽうでうってさ



にてさ やいてさ くってさ
それを この葉で
ちよいと かぶせ

②

いちもんめのいっちゃんか
いも買いに行ったら
いもなかった

二もんめのいっちゃんか
にんじん買いに行ったら
にんじんなかった

三もんめの三ちゃんが
さば買いに行ったら
さばなかった

③

四ちょう目のよっちゃんが
よも買いに行ったら
よもがあつたあが

お金がない
ボールをもらって遊ぶのね

いちもんめの いーすけさん
いの字がきらいで
いちまんいっとこく
いといと いとまのおくらに
おさめて
にもんめにわけた

〈そのほかの遊び〉

① せっせっせーの

よいよいよい

おちゃらか

おちゃらか

おちゃらかほい

② あぶくたった

にえたった

にえたか

どうだか

食べてみよ

むしゃ むしゃ むしゃ

もうにえた



となりのおばさん

今何時

れい時

あなたのお名前なんて言うの

○○○○

むかしの遊び・わらべうた・年中行事等は、年代や場所によって多少のちがいがあると思われます。

このような遊び・わらべうた・年中行事などは、昭和三十年代の初めごろまではよく見られましたが、その後は生活の変わり方に影響されて急に見られなくなりました。

五、年中行事

つしまさん（石津）

七月十四日、家の近くにつしまさんのおまつりがあります。今から千年前、大陸から、ひのきの苗がきた。お百しょうさんがねがいごとをしたら、その苗木は、すくすくとのびて、お百しょうさんは大喜びでした。それから、お百しょうや、りょうしたちが、お米や、さかながたくさんとれるようにおいのりをつづけました。それが、今のつしまさんのおまつりのはじまりです。このおまつりは、ちようちんまつりともいわれ、その年に生まれた子どもは、自分の名まえを書いたちようちんを、神さまにあげます。

そのちようちんをともして、夕方、六時頃

からおまつりを始めます。子どもたちは、ゆかたを着て、おさいせんを持って、つしまさんに、集まります。おまいりをする、赤飯を小さくにぎったおにぎりがくばられます。また、大人の人たちには、御神酒おみきがふるまわれます。このおまつりは、三時間位でおわりになります。

えびすこう（恵比須講）

十一月十九日をよいえびす、二十日をえびすこうといって、商売はんじょうをいわう習かんがあります。十九日のよいえびすには、新屋あらやのえびす神社におかざりものを買いに行き、毎年、おかざりものを買いかえます。どの家にも「おいべっさん」がまつてあり、そこには、大根、かけうお、おひら（にももの

のおかず)、くだもの、おかし、お酒などをそなえます。二十日の夜は、それを家族でくじびきするのです。半紙にあたるものの名まえをかき、こよりにして引きあてます。子どもにお酒があたったり、おはしがあたりたりして、泣いたり、笑ったりして、たのしいひとときをすごすのです。

また、商売はんじょうをいいうために、お店でもさかんにくじびきを行ないます。子どもたちは、手に手に紙ぶくろを持って、あっちのお店、こっちのお店で、くじびきをさせてもらいます。そしてくじであたったものを、その紙ぶくろに入れるのです。くじの中には、「泣いてかえれ」などというのもありました。そんなくじがあたりすると、お店の人が「それでもかわいいそうだから。」と言って、

他のものをそっと、ふくろの中に入れてくれるので、喜んで次のお店へと出かけていきます。そのころの子どもたちにとっては、たのしい行事であったのです。

お盆の行事

『ヒャクハッタイとトウロンサン』

(石津浜・石津岡)

七夕まつり(八月七日)がおわると、子どもたちは、自分の家ばかりでなく、近くの家からも七夕の竹を集めてきます。上級生はのこぎりや小刀などを持ってきて、きめられた長さに竹を切り、先にローソクがたてられるようにつくりまわります。また、家々をまわってお金をきふしてもらい、それで、マッチとローソクを買います。お盆の三日間(十三・十四・

十五日)は道へ竹を立て、先のローソクに火をつけて、お盆の夜をすごすのです。ローソクの火が消えると子どもの行事がおわります。

その他、その年に家の人が死んだ初盆はつぼんの家では、特別に自分の家の前にたてます。

このようにしてヒヤクハツタイの行事がおわると、十六日にはみんなでかたづけをし、竹をしばって、次のお盆までそれをお寺のえんの下にあずけてもらいます。

トウロンサンもやはり、七夕まつりの竹を集めて、浜の河原へ十メートルから十五メートルほどの大きな竹(木)の柱をたてます。その先に、これも七夕の竹や、細い竹を使って、カゴのように編あんだ火受け(サカツキともいう)をつけ、中にワラや、音をたててもえるタイマツや、クズを入れておきます。八

月十五日、暗くなると近所のおとなや子どもたちが集まってきました。集まってきた人たちは、タイマツをたばねてひもをつけ、それに火をつけてふり回し、火受けめがけてなげ上げます。うまく火受けにあたると火がつき、音をたてて大きなタイマツとなつて、もえ上がります。

黒々とした夜空に、あかあかともえる火は、お盆にきた精霊せいれいをなくさめ、また、水の事故で死んだ人の霊をとむらうという。この土地の人々のねがいが、こめられていたのです。しかし、この行事は、現在はほとんど行なわれていません。

船ふねおろしと、船のかんじょう

船おろしとは、新しく船をつくった時の、
おいわいの行事です。新しく船ができると、
どの船も大瀬崎へ必ず、おいのりに行ってき
たものです。そこから帰港すると、港でその
船から、岡へむかって、おもちが投げられま
す。そのおもちをひろうのが楽しみで、「きよ
うは、〇〇の家の船おろしだそうだ。」と聞
くと、友だちとさそいあって、出かけたもの
です。そんな人が、あちこちから集まってき
て、かなりにぎわいます。その人々の中へも
ちが投げられるのですから、みんなひっしで
おもちをひろいました。あとで何とおもちが
ひろえたか、友だちと比べあったものです。

むかし、船は月給せいではありませんでし
た。年に二回、船元の家に行って給料をもら

いました。給料日は決まっていなくて、海が
あれていて船が沖へ出れない日が、その日に
あてられました。その日、船元の家に行くと、
たのしい事がありました。まず、家の庭には、
大きなかまどがつくられ、その上には、これ
また大きなべがかけられており、その中で
は、あつあつのおしるこができていて、子ど
もたちや、近所の人にもふるまわれました。あ
まいものの少なかった時代ですので、その味
はかくべつでした。また、細かなお金を半紙
につつんでおひねりにしてあって、これも子
どもたちにくれるように、用意してありまし
た。船のかんじょう日は、子どもにとってた
いへんうれしい日でした。

灯籠 (田尻北)

二十年ほど前まで、この地区では、お盆のおわりの十六日に、朝早く子供たちが各家庭をまわり、七夕さんのささと、たたみ表を作る時にでるいらない「い草」と、お盆に仏さんの食器に使ったかわらけを集めました。

それらを浜で、大きな灯ろうに、火をつけた中に入れてもやしました。

この火を消すのにささをつかいました。さに海の水をつけて、その水で消したのです。

ところが、この行事も、い草を作ることが少なくなり、い草が集まらないということではいつしかやめてしまいました。

今では、数年前に、和田浜で青年団の人たちが、とうろうを作り、この行事を復活させています。

六、昔のくらしを知らせる土地の名

土地につけられた名まえには、そこに住んできた人々がどのように生活をしてきたかを教えてくれます。

土地のようす(地形)などからつけられたもの、土地の利用によってつけられたもの、土地の持ち主や、開こんした人の名によってつけられたものなど、いろいろあります。

しかし、近ごろは土地の開発などによって、土地そのもののようすがすっかり変って、昔の面影を、まったくなくしてしまっている。地名をつけた理由なども分らなくなってしまう。地名もなくなったり変ってしまった所が多くあります。でもこれでは祖先の人びとの努力のあとが消えてしまうことになり、たい

へん残念です。

そこで、この地区の昔からあった地名の小字を、字ごとにまとめてみました。字は江戸時代の村の単位を表わしております。小字はさらにそれを小さくしたものです。

これを調べたものは昭和のはじめの頃、作られた地籍図をもとにしました。ここにあげられた地名以外にもあるかと思えますし、また地名の由来（つけられたわけ）なども調べてみたいものです。

下小田

番匠給(バンシヨウキユウ) 尻堀(シリホリ)
普賢西(フケンニシ) 宮脇(ミヤワキ)
普賢背戸(フケンセド) 麦田(ムギタ)
上田島(ジョウエンジマ) 高ジク 五百

光西寺後(コウサイジアト) 芝荒(シバアラ)
市右エ門下(イチウエモンシタ) 源
五郎西(ゲンゴロウニシ) 寺前(テラマエ)
モロヤ 松葉(マツバ) 五百地(ゴヒヤクジ)
淵田(フチダ) アラヤ 向島(ムカイジマ)
戸井下(ドイシタ) 五郎兵衛海道(ゴロベエカイドウ)
堂前(ドウマエ) 龍頭(リュウトウ) 砂間(スナマ) 宮下
(ミヤシタ) 宮西(ミヤニシ) 井戸尻(イドジリ)
金三郎下(キンザブロウシタ) 堂西(ドウニシ)
弥六田(ヤロクダ) 本郷(ホンゴウ)
北割(キタワリ) 松原添(マツバゾイ)
五人割(ゴニンワリ) 川向(カワムカイ)
川北(カワキタ) 川南(カワミナミ)
与五兵衛背戸(ヨゴベエセド) 雁島(ガンジマ) 松立下(マツタテ)

シタ) 松ノ内(マツノウチ) 小杉田(コ
スギタ) 役免 中ノ島 天神原 道下上見
(ミチシタウワミ) ウタリ 京田(キョウ
ウ) 三百地(サンビヤクチ) 砂荒(スナ
アラ) 佃(ツクダ) 次郎右エ門芝(ジロ
ウエモンシバ) 地藏下(ジゾウシタ)

北新田

寺西(テラニシ) 柳川原(ヤナギカハラ)
揚見(アゲミ) 弥左エ門分(ヤザエモンワ
ケ) 柳ノ内 向島(ムカイジマ) 出口
(デグチ) 忠左門前(チュウザエモンマエ)
堀ノ内(ホリノウチ) 舞台(ブタイ) 家
尻(イエジリ) 砂間(スナマ) 道上(ミ
チウエ) 清右エ門分(セイウエモンワケ)
太郎兵エ西(タロウベイニシ) 弥平分(ヤ
ヘイワケ) 清右エ門(セイウエモン) 上

川原 茶畑 彦右エ門分(ヒコウエモンワケ)
片田(カタダ) 伝エ門分(デンザエモンワ
ケ) 両垂(リョウスイ) 大島(オオジマ)
埋井戸(ウメイド) 高才(タカサイ) 垂
弥八下(ヤハチシタ) 弥十川原(ヤジユウ
カハラ) 弥平下(ヤヘイシタ) 彦三起
(ヒコサキ) 弥平西(ヤヘイニシ) 小梅

田(コウメダ) 道下(ミチシタ) 庄兵エ
西(シヨウベエザ) 左右門西(サウエモン
ニシ) 弥平次当(サヘイジトウ) 左右門
分 千日川原 松原崎 三日月 池向
田尻北

宇たり(ウタリ) 節こぎ(セコギ) 古
屋敷(フルヤシキ) 大島 寺下(テラシタ)
居廻り(イマワリ) 上北荒(カミキタアラ)
立丁(タテチヨウ) クラノ下 蔵ノ西(ゾ

ウノニシ) 吐場川上(ハキバカワカミ)
 久右エ門島(キユウエモンジマ) 宮下 宮
 前 松ノ内 半三瀬戸(ハンゾウセド) 中
 西通 広(ヒロ) 瀧ノ鼻(タキノハナ)
 前新田(マエシンデン) 大豆口(ダイズグ
 チ) 下ノ下(シモノシタ) 下新田(シモ
 シンデン) 大万島(ダイマンジマ) 鍵ノ
 手(カギノテ) 芝田(シバタ) 大坪(オ
 オツボ) 汐入(シオイリ) 浜新田(ハマ
 シンデン) 下北荒(シモキタアラ) 中ノ
 島 玄頭(ゲントウ) 堀切(ホリキリ)
 原 浜川原(ハマガハラ)
 石 津
 平兵エ島(ヘイベイジマ) 日焼島(ヒヤ
 ケジマ) 蔵前(ゾウマエ) 新地島(シン
 チジマ) 向島(ムカイジマ) 六反(ロク

タン) 清水川(シミズガワ) 与五右エ門
 島(ヨゴウエモンジマ) ドブ島 海道道下
 (カイドウミチシタ) 燈籠場(トウロウバ)
 荊坪(バラツボ) 西浦 本田島(ホンデン
 ジマ) 北川原(キタガワラ) 下島(シモ
 ジマ) 会下島境(エゲノシマザカイ) 作
 右門下(サクエモンジタ) 兵太夫下(ヒョ
 ウダイシモ) 風間(カザマ) 中ノ島(見
 取場(ミトリバ) アラアキ島 荊島(バラ
 ジマ) 浜川原(ハマカハラ) ゲンバイ
 弥右エ門島 モンドウ 新田島 宮ノ西 南
 川原 中川原

(読みがなについては

「静岡県地名大辞典」角川版による)

七、小川港のできるまで

小川港の昔

小川港は江戸時代に大井川の材木を運び出すために作られた木屋川の川口に、できた港でした。木屋川は一六六〇年頃までは、田尻と田尻北の間（今の東洋水産の工場の近く）で海に入っていたようです。その頃は和田湊みなとと言われていました。そして近くには、大井川から材木を運んでくる舟の舟だまりや、貯木場があったそうです。

しかし、川口はいつも波がおし寄せてくるので、ふさがってしまつたために、川の流れ道について争いがありました。そこで木屋川の流路を変えて、川口を入江いりえのようになっていゝる石津の方へ変えました。その結果、今のよ

うな木屋川ができあがりしました。そしてこの川口の港が今の小川港のはじまりです。ところがこの辺りは、大昔から、大井川や瀬戸川などがはらんした土地ですから、川口や入江の近くの海もあまり深くなく、砂などがたくさんたまっていました。また台風の時など入江や川口がふさがって困ることが、たびたびありました。

明治になって鉄道がしかれるようになると、川を使って材木をはこぶ必要がなくなると、漁港としての役割ができました。明治四十二年（一九〇九年）には焼津の漁船が台風などよけるためのひなん港として使われるようになりしました。

大正の初め頃漁船の動力化や大型化がはじまると漁港としての役割が、ますます重要と

なってきました。

昭和二年、木屋川の川口にコンクリートを
つめた古い船を沈めて、川口がうまるのを防
ぐ工事をしましたが、思うようにいきませ
んでした。

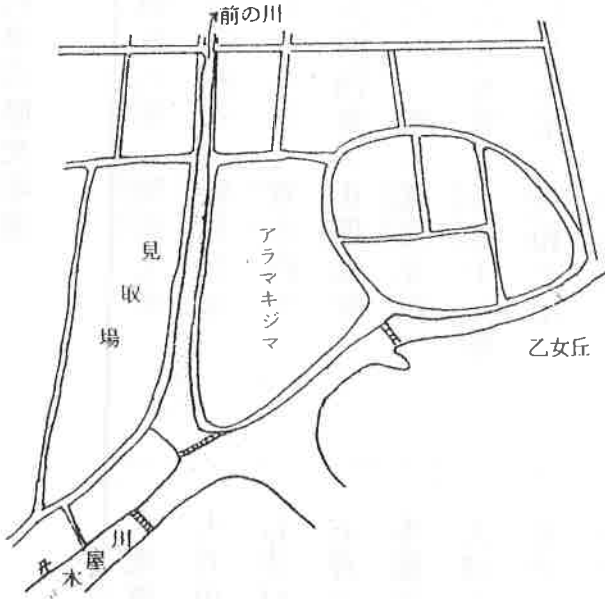
昭和七年から九年にかけて、舟だまりをつ
くったり、荷揚場をつくったりしましたので、
漁港としての形も次第にととのってきました。
このようになるのと、漁場も、だんだん遠くへ
広がっていきました。しかしまもなく太平洋
戦争が始まり、漁業もおとろえてしまいま
した。

やがて戦争も終り、小川村の人びとも、漁
業を発展させたいと願うようになりました。
そうして房総半島沖の方へさばつりに出るよ
うになり、船の数もふえ、大きくなってきま

した。でも港は浅く、しかも入江や川口も大
波をうけて時々ふさがり、近くの田んぼや、
あき地にも、水があふれるありさまでした。
そのため石津の農民たちも大へん困って、
なんとかしなくてはならないと考えておりま
した。

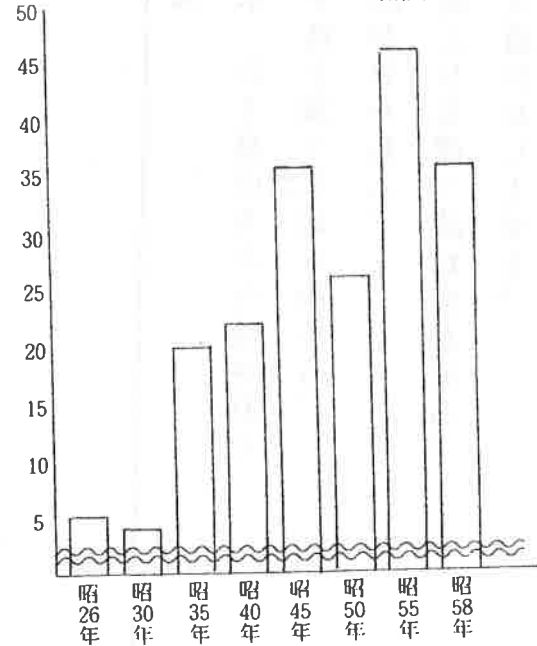
その頃、舟だまりのとなりの土地は、うな
ぎの養魚池になっていました。その西側の土
地は湿田で、仕事が大変なわりに収穫を思うよ
うにあげることができませんでした。そこで、
養魚池をもっている石津共栄会の人々と話し合
い、この土地を寄付してもらいました。そし
てこの土地を港として掘り、となりの湿地を
埋め立てて、田や宅地に利用するようにしま
した。この仕事は昭和二十六年から始まり、
昭和三十七年に一応の完成をみました。

小川漁業浚渫埋立計画図
(昭和26年ごろ)

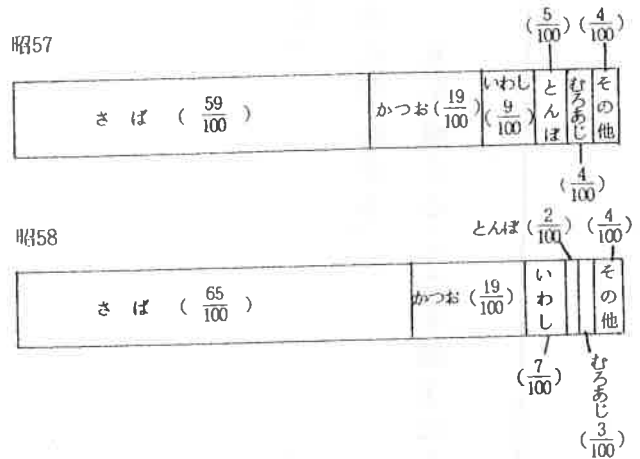


小川港ができたことによって、木屋川の川口がうまって、附近の土地が潮水であらわれるという心配がなくなりました。
またこの港を中心にして、伊豆七島方面のせだす銭州漁場のさば魚の開発がされて、近海の漁業がおおいに発展するようになりました。

小川漁業協同組合取扱い高 (職員広報)



おもな魚のとれ方



八、石津の歴史年表

<p>一四九八年（明応七年） 一六〇四年（慶長九年） 一六二七年（寛永四年） 一六四四年（正保元年） 一六六一年（寛文元年） 一六九九年（元禄十二年） 一七七〇年（明和七年） 一七七一年（明和八年） 一七七二年（明和九年） 一七七五年（安永四年） 一八一六年（文化十三年） 一八三六年（天保七年） 一八四一年（天保十二年）</p>	<p>大地震 大津波 大井川大こう水 会下島のあたり流される。 石津村検地（土地を調べ年貢を決める。） 石津より与惣次が分かれる。 木屋川が田尻北より石津へ流れをかえる。 大ぼう風雨 大波がおしよせる。 日でのりのひ害 日でのりのひ害 大雨でこう水のひ害 大ぼう風雨 前年より大不作が続く。 大ぼう雨 全国にききんが広がる。 松苗五〇本ぐみ一五〇本を植えることを領主にお願 する。</p>
---	---

一八四四年（天保十四年）

（天保のころ）

一八四四年（弘化元年）

一八四六年（弘化三年）

一八四九年（嘉永二年）

一八五一年（嘉永四年）

一八五三年（嘉永六年）

一八五四年（嘉永七年）

一八五四年（安政元年）

一八五七年（安政四年）

一八六八年

一八七二年（明治五年）

一八八三年（明治十六年）

しおよけ堤防や^{いり}樋作り^ひのお願いをする。

しおよけ堤防やしお風を防ぐ松林を作ること^を許され
領主より人夫をよこしてたすけてくれる。

樋の修理をする。

（※樋とは堤防の下に溝を作り、田畑
に水を入れたり出したりする装置）

新開堤の工事（四五〇m）

木屋川の川口のはば一八mにほることをお願いする。

新開堤の工事 土俵二七〇俵つかう。

新開堤の工事二七〇m

新開堤の工事四五〇m

大地震 見取場ふ近の土地がもりあがり、新しく開こ

んできる土地が生まれる。

新しい波よけ堤防を作るお願いをする。

明治維新

新開堤にある樋の修理をする。

石津村一七二戸 五戸ずつ組を作り開こんの仕事をする。

る。

- 一八八四年（明治十七年）
- 一八八六年（明治十九年）
- 一八八七年（明治二十年）
- 一八九一年（明治二十四年）
- 一八九二年（明治二十五年）
- 一八九六年（明治二十九年）
- 一九一〇年（明治四十三年）
- 一九一一年（明治四十四年）
- 一九一二年（明治四十五年）
- 一九一五年（大正四年）
- 一九二〇年（大正九年）
- 一九二七年（昭和二年）
- 一九三七年（昭和七年）
- 一九四八年（昭和二十三年）

見取場の湿地（しっち）にはい水路を掘る。逆水門二カ所作る。（小川村となる。）

開こんした土地一・五ヘクタールになる。

逆水門の工事を行う。

見取場に逆水門二か所作る。

アラマキ島に水門を作る。（四十八円四十二銭二厘）

荊坪逆水門を作る。（三百二円四十六銭九厘）

瀬戸川の大こう水 小川村で五〇〇戸水につかる。

開いた土地六・七ヘクタール（田四・三ヘクタール）

電灯がつく。

木屋川の川口がうまらないように、※ちんわく沈枠（※堤防または海岸の修築に用いる枠）を作る。

潮風による稲のひ害

木屋川の川口に船にコンクリートをつめて沈める。大

波のため失敗する。

舟だまりができる。

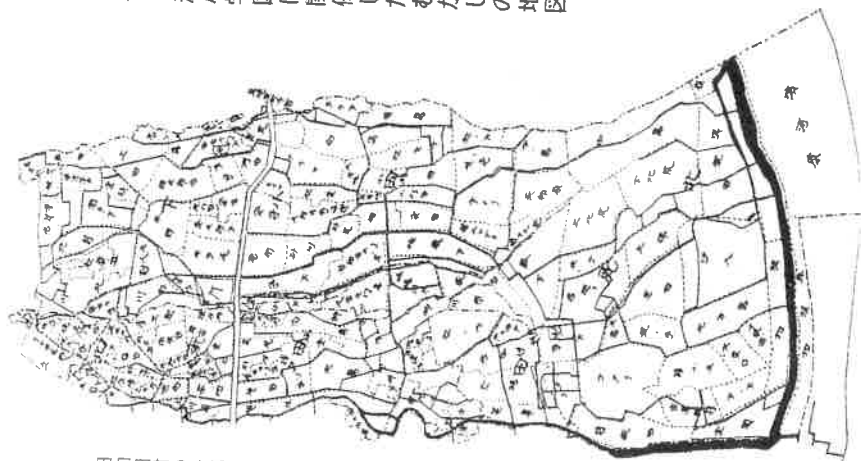
アイオン台風 潮風のひ害

一九五一年（昭和二十六年）
一九五二年（昭和二十七年）
一九五三年（昭和二十八年）
一九五四年（昭和二十九年）
一九五九年（昭和三十四年）
一九六〇年（昭和三十五年）
一九六三年（昭和三十八年）
一九六七年（昭和四十二年）

小川港を作りはじめる。（アラマキ島の土地を掘りその土をうめ立に使う。）
小川港近くの区画整理がはじまる。
一三号台風 稲が白^{しろ}ほになる。
浜水道組合をつくる。
浜川原へ松を植える。（全戸奉仕作業）一二〇〇本
小川港ふ近の区画整理が終る。
荆島の区画整理が始まる。
荆島の区画整理が終る。

（「石津共栄会誌」より）

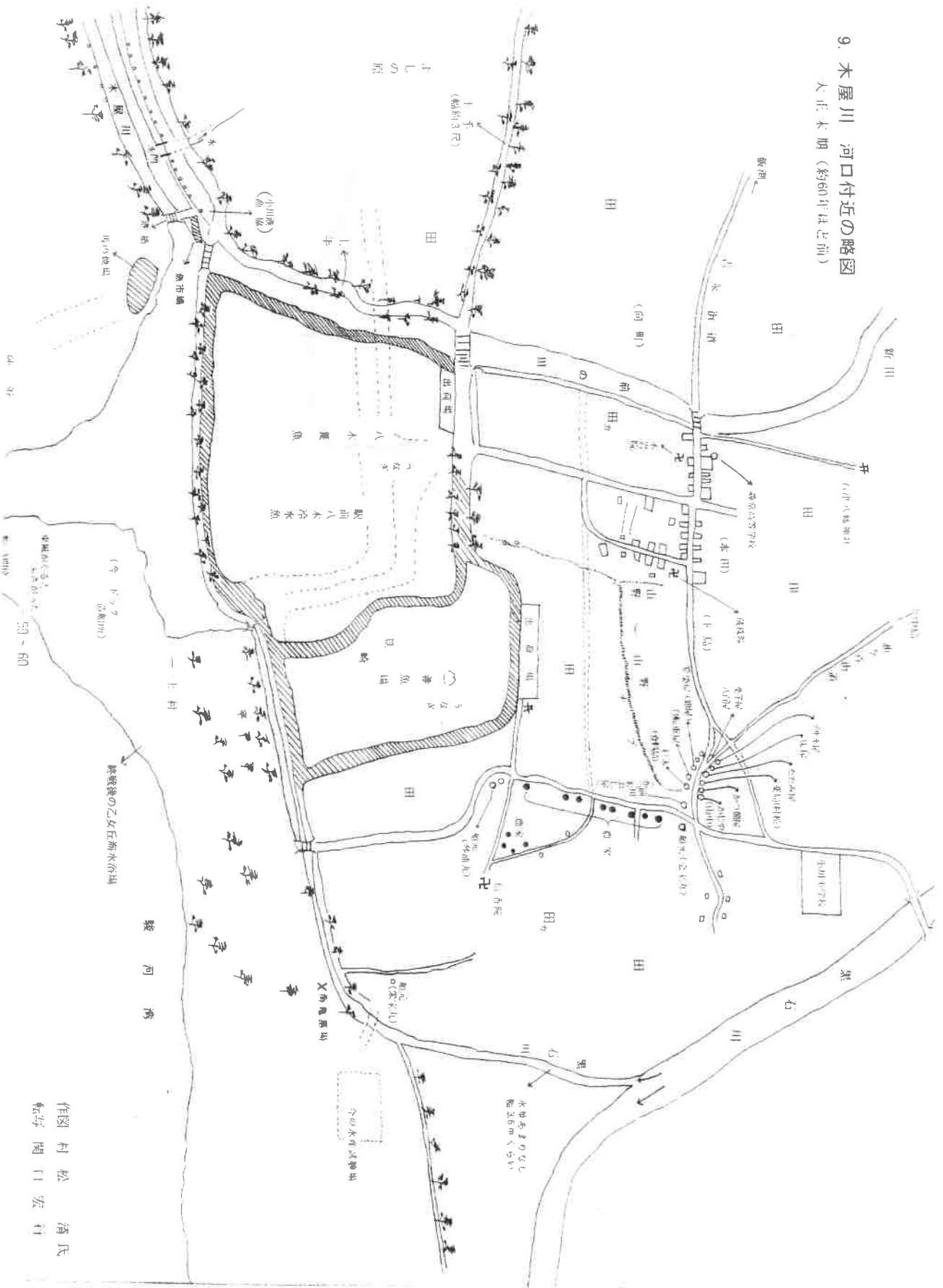
十、港小学区に関係したむかしの地図



旧和田村の一部



9. 木屋川 河口付近の略図
大正末期（約60年ほど前）



作図 村松 清氏
転写 関口 宏行

〔参 考 文 献〕

焼津市史（上・下）

小川町誌・小川村史

和田村誌

和田の浦

志太郡誌

やいづの昔話

焼津水産史（上・下）

静岡縣水産史（全）

焼津蒲鉾史

県棒受網鯖釣業漁協創立30周年記念誌

市制施行30周年記念焼津

古谷定吉先生（静岡県珠算協会）

焼津の水産業

静岡の数学Ⅰ

石津共栄会誌

焼津漁業史

やいづ風土記

チビッコ天国

焼津市社会科副読本

◆取材協力・資料提供者（順不同）

〈地域関係者〉

橋ヶ谷 真一
 村松 清
 増田 徳治
 橋ヶ谷 玖市
 古谷 剛造
 増田 保郎
 桜井 茂
 加茂 喜久雄
 大石 菊江
 平田 正美
 桜井 松次
 港公民館
 不岩 院
 長久寺
 蔵珠院
 小川 漁協
 小池 岩男

〈児童〉

港小歴史クラブ
 (58年度)

村田 金作
 山梨 仙吉
 高 清 英次郎
 桜井 温子
 原崎 大雄
 小林 姓
 片岡 千恵子
 石原 智子
 野中 弥生
 舞谷 道子
 松永 直美
 岸本 佐和子
 石崎 大輔
 高 清 慎
 山梨 恵里

加茂 典子
 天野 裕司
 村松 彰
 中村 学
 清水 良枝
 宮嶋 淳子
 河口 晶彦
 松下 浩子
 牧野 容子
 田代 清乃
 鈴木 亜子
 藁科 知行
 桜井 則之
 大沢 史明
 増田 将雄
 平田 晓年
 松本 起世子
 大石 恵子

斉藤 公洋
 原崎 友里
 鷺野 搖子
 増田 美樹子
 繁田 以世子
 鈴木 恭子
 藁科 裕美
 本間 美千代
 黒田 和弘
 近藤 栄彦
 淀村 隆久
 近藤 隆久
 村松 麻衣子
 小泉 加奈江
 小泉 幸子
 小池 康正
 渡辺 奈津子
 橋ヶ谷 直之

◇ あとがき

本校の学区は、焼津市内の新興地帯にあり、歴史的には新しい地域であると思われてきました。しかし、学区内を取材してみると江戸時代の遺跡が、意外に多く残されていることがわかりました。

昔もいまも人々の生活は、自然とのかかわりの中で営まれ、より進歩向上してきました。私達は、地域における伝統文化を発掘し・継承していこうと、二年間にわたり調査をつづけてきました。

お年寄りに取材した話は、どの話にも、私達が生きていくための貴重な指針が含まれているといえましよう。

内容の記述については、まだ不十分な点があるかもしれませんが、それについて御指摘いただければ幸いです。

取材にあたり、多くの方々から御協力をいただきましたことをここに厚く御礼を申し上げます。

(ふるさと委員会)

「木屋川のほとり」

昭和六十年三月

焼津市立港小学校

ふるさと委員会

―編集・執筆協力―

関口宏行

増田宏子

田中義也

北野教子

八木久子

大石しのぶ

大石ますみ

鈴木 衛

近藤広江

渡辺泰子

鈴木和子